

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：30108

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日

課題番号：21720126

研究課題名（和文）1920 年代における日韓文化交流に関する研究-柳宗悦と廃墟派を中心に-

研究課題名（英文）Cultural exchange between Japan and Korea in the 1920s; focusing on Yanagi Muneyoshi and Pyeheo group

研究代表者 梶谷 崇

（北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授）

研究者番号：10405657

研究成果の概要（和文）：1920 年代における日韓の新聞・雑誌記事の言説分析を通して、柳宗悦と廃墟派を中心とする朝鮮人青年知識人との文化的な交流の様相を明らかにした。廃墟派は一般に柳宗悦の朝鮮における文化事業を支えたグループとして認識されている。しかし、今回の調査・分析を通じ、廃墟派が自民族の文化的発展という植民地支配という状況の中の複雑なコンテクストの中で活動していたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Through discourse analysis of newspaper and magazine articles in Japan and Korea in the 1920s, I made it clear aspects of cultural exchanges with Yanagi Muneyoshi and the Korean young intellectuals such as Pyeheo group mainly. Pyeheo group has been regarded in general as supporters of Yanagi's cultural projects in Korea. However, this researches made it clear that Pyeheo group were working in a complex context for the purpose of developing their ethnic culture under the colonial rule.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：韓国、柳宗悦、廃墟派、日韓比較文学、朝鮮人留学生

## 1. 研究開始当初の背景

近年の柳宗悦研究、特に植民地朝鮮との関わりに関する研究は、日韓の研究交流の活発化、インターネット等の情報記述の進歩・普及に伴い、これまで日韓双方でばらばらに進められていたものが、急速に当方の方向へと進んでいる。研究論文や文献資料のデータベースが両国で整備されることによって、柳宗悦と植民地朝鮮との関わりに関する研究資料や成果を共有することが可能となった。

柳研究は、日韓共に 1980 年代末から 90 年代初めが最初の大きな転換期であったといえる。従来日本においては、「柳宗悦は帝国日本において良心的知識人であり得たか否か」という点に焦点化され、もっぱら日本の帝国主義との関係性の中で論じられて来た。1960 年代の幼方直吉や 70 年代の鶴見俊輔、80 年代の高崎宗司の研究が代表的なものである。

一方の韓国でも同様で、それまで「柳シン

ドローム」と呼ばれる柳宗悦の朝鮮論に対する拒絶反応が以前は存在していた。しかし韓国でもまた 80 年代後半頃より柳研究は転換し始めたという。韓国の柳宗悦研究者である李仁範は、「幸いにも 1980 年代以後発表された何編かの論文のおかげで柳の朝鮮芸術論はある時よりも再解釈の可能性に対する期待が高まった」（『조선예술과 아나기 무네요시（朝鮮芸術と柳宗悦）』、李仁範、シゴン社、1999 年）と述べている。

1990 年代以降、日韓ともに柳宗悦研究は文化的な側面に強く光を当てるようになった。趙善美らによって美術史的な側面からの柳の分析が行われ始めた。また柄谷行人、竹中均、朴裕河らによってオリエンタリズム批評の視点からも柳宗悦の文化的な政治性が指摘された。

単に柳宗悦という人物が帝国主義的であったか、あるいは良心的知識人出会ったかという問題意識から、柳の思想、活動が当時の文脈においてどのような意味を持つことになるのか、文化の政治性が大きく問われることになった。

本研究は文化史的意義を考察対象としているという点で 90 年代の柳研究の延長線上にあるといえる。しかし 90 年代までの研究はもっぱら柳宗悦のテキストそのものを主な分析対象としていたのに対し、本研究は新聞・雑誌記事などを主な分析対象とする。柳の活動を同時代コンテキストの中に投げ込むことで、大正期の日本と朝鮮の文化史的な文脈の中で柳を再評価できるものとする。

## 2. 研究の目的

1990 年代に展開された研究は、柳宗悦のテキストが主な分析対象であった。それらの研究成果が柳思想の幅の広がり、問題系の大きさを明らかにし、さらなる日韓近代史の問題を問いかけるきっかけとなった。

だが、柳テキストが分析される一方で、柳思想が問われる同時代コンテキストに対する一次資料を用いた検討がまだ不十分であった。たとえば、柳宗悦の活動に対する朝鮮半島の同時代言説などである。

そこで本研究課題では、柳宗悦と活動とともにした朝鮮人青年知識人層（特に廢墟派）の諸言説を発掘し、その分析を行うことで、柳が活動した時代の朝鮮半島の状況を明らかにし、それもとに再度柳の思想を再評価することを目的とした。

## 3. 研究の方法

近年、日韓双方の近代歴史資料の電子化およびデータベース化が急速に進んでおり、関連資料の抽出が容易になってきている。本研究ではそのような情報ツールを活用しながら、日本及び韓国の図書館に所蔵される柳宗

悦と廢墟派に関わる資料を中心として、網羅的に収集し、言説分析を行った。

日本では国立国会図書館、韓国ではデジタルライブラリーのサイトを活用しながら、主に韓国中央図書館の資料を対象に収集した。また、具体的には以下のような項目が明らかになる資料に着目して調査を行った。

(1) 柳宗悦と廢墟派の活動が日本・朝鮮でどのような行われていたのか。

(2) それらが、日本・朝鮮社会でどのように受け止められ、影響を及ぼしたのか。

(3) 当時の日本と韓国の文化交流のあり方はどのようなものであったか。

また、調査を進めていく中で、彼らの活動が 1945 年以降にも大きな影響を及ぼしていることが明らかになったため、並行してそれらの関連資料も調査対象とした。たとえば、廢墟派およびその関係者たちが独立後に書き残した回顧録や自伝、柳宗悦らの朝鮮民族芸術観の影響が見られると考えられる戦後日本の小説家、文化人（たとえば立原正秋や白洲正子など）の諸言説である。

## 4. 研究成果

2009 年度より 4 年間にわたり日本および韓国の近代雑誌や新聞等の資料を調査・収集した。2 次資料も含め約 800 点程度である。

09・10 年度は主に資料収集が主たる活動内容であった。柳宗悦と廢墟派を中心とする朝鮮人知識人たちとの交流の様子が分かる資料に加えいくつかの回顧録を発見した。南宮璧、呉相淳、閔泰瑗、廉想燮といった韓国近代文学を担った若者や羅蕙錫といった韓国の新女性との間で柳宗悦との活発な往来の様子が、それらの文献資料から明らかになった。

11・12 年度はそれらの文献資料の整理・発表および朝鮮語文献の読解、翻訳作業を進めた。南宮璧の当時の日記・評論や雑誌『廢墟』における柳宗悦に対する彼等の認識や、近代を生きた彼等にとっての近代科学や社会思想としての民芸といった概念について、日本国内の有島武郎などの言説も交えながら分析を行った。

12 年度は以上の成果発表を行いつつ、当初の研究テーマに付随した新たな問題に対する検討も行った。例えば、呉相淳の回顧録などから読み取れる戦後に辿った彼等の過去に対する認識の対照が浮き彫りになり、今後取り組むべき新たなテーマが浮かび上がった。それに連なる形で、戦後の在日朝鮮人作家（立原正秋、李良枝など）や白洲正子の朝鮮芸術や工芸芸術に対する認識についても考察を深めた。

また、柳の朝鮮における活動は、人的交流と共に朝鮮芸術（とりわけ工芸美）への価値観の変容を迫るものであった。したがってそ

れらの戦後における認識の有り様を明らかにすることで柳宗悦の朝鮮論の意義を考察する上で有効である。柳の民芸運動は理想主義的な社会運動であったことを踏まえ、柳と朝鮮社会が芸術的なユートピア思想において連動していたことについても指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

・ 梶谷崇、有島武郎と柳宗悦における中世主義-ロダン・ゴシックから民芸運動へ-、有島武郎研究、査読有り、第 16 号、2013 年、pp. 45-58

[学会発表] (計 5 件)

・ 梶谷崇、工芸ユートピア思想の東西-ウィリアム・モリスと柳宗悦の工芸思想を手がかりに、第 2 回比較文学研究会 (日本比較文学会 北海道・東北支部共催)、2013 年 3 月 16 日、仙台市青年文化センター

・ 梶谷崇、大正知識人たちの「科学」-柳宗悦における「科学」言説の変容をたどって-、有島武郎研究会第 50 回全国大会、2011 年 12 月 3 日、二松学舎大学

・ 梶谷崇、移民文学の比較研究-ホームとホームランドの狭間で：朝鮮から日本へ、2011 年度に本比較文学会北海道大会、2011 年 11 月 5 日、北海道大学

・ 梶谷崇、ロダン、ゴシックから民芸運動へ-柳宗悦美学における中世の評価について、有島武郎研究会第 46 回全国大会、2009 年 12 月 9 日、二松学舎大学

・ 梶谷崇、柳宗悦-白樺美術館から朝鮮民族美術館へ至る軌跡、日本比較文学会 2009 年度北海道支部研究会、2009 年 12 月 5 日、北海道大学

[図書] (計 1 件)

・ 梶谷崇・他 8 名、소명출판, 야나기 무네오시와 한국、2012 年、364 ページ、pp. 33-55, 56-90, 129-163

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梶谷 崇 (Kajiya Takashi)

北海道工業大学 准教授

研究者番号：10405657